県女第一期生より，皆実高校生に至る六拾六年の歴史に連なる者。また今後，この同じ流に連なる者，手をつなぎ足音高く歩もう。足音高く声を揃えて元気に歩もう。我等は，皆実有朋会員である。歩もう，歩もう，力強く。

皆實有朋

発行所
広島市出汐町
広島皆実高等学校内
社団法人
皆実有朋会
印刷所
四反田印刷株式会社
翠町電㊿2024・5017

同窓会館の青写真出来る

母校の南西端に

去る六月二四日に開かれた六月定例評議員会で同窓会館建設問題が討議され、皆実高校内の図書館南側の空地に建設することで県に陳情することが承認されました。又この席上に同窓会館の設計図が提出され、同窓会館の建設もいよいよ軌道にのることになりました。

この日皆実高校生徒ホールに集まった評議員は三十余名。まず議長に竹内泰彦さん（皆実二期）を選んだあと、理事会側から四一年度決算と四二年度予算案の説明があり四二年度予算案を一部修正、承認しました。

この後、同窓会館問題の討議に移り、まず増田校長より同窓会館建設地について学校側の考えが述べられ、先の建設準備委員会で話題となった旧本館跡は四三年度インターハイに備えて、シャワー室、便所、体育器具庫等の建設が予定されており、ここに同窓会館を建設することは困難であることが明確となりました。

このため他の建設地を検討した結果、図書館南側で、現在弓道の練習場として使用している空地が候補地としてあがりました。

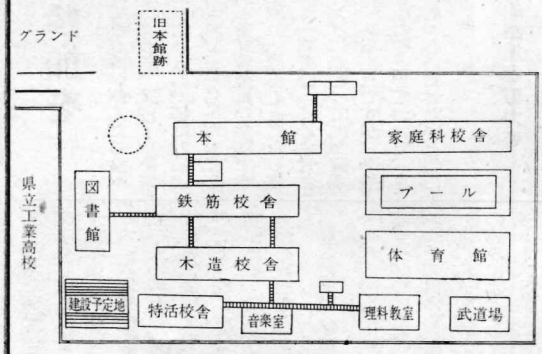
この空地は母校敷地内の南西端にあり、県立工業高校と境を接し日当り、通風ともに申し分ないことが報告されました。増田校長もこの空地なら将来建設を予定されているものはなく、提供できると述べられました。

しかしこの土地に同窓会館を建設した場合、将来図書館の跡に建てられる講堂の陰になってその景観がそこなわれるのではないかという一部委員の意見があり、熱のこもった討論が展開されました。

しかし結局、「他に適当な空地がない、講堂を建設する際その距離を十分に保てば景観がそこなわれることはない」との結論に達しこの空地に同窓会館を建設することで諸準備を行うことが承認されました。

上、完成予想図

下、建設予定地略図



近代的な建物に

この席上、倉本律雄さん（皆実二期、徳山市在住）の手になる同窓会館の設計図が公開されました。この設計図によると建物は鉄筋コンクリート二階建、総面積七五六平方メートル（約二三〇坪）で一階には事務室の他に六十五年の歴史をつづる資料室をはじめ、料理室、浴室、在校生用の保健室が設けられ、二階には五〇人以上収容できる大集会場をはじめ、小会議室、宿泊施設としての和室、礼法室が設けられます。

特に玄関ホールは一階から二階へ吹き抜けとし、そこに母校の歴史をデザインした壁面を取り付けるように設計されており、古いものと新しいものとの調和を保つよう工夫されています。

この設計図を見たある委員は「こんな立派なものが出来るなんて夢のようです。この同窓会館の建設によって、同窓生と在校生がほんとうにひとつになれるような気がします。」と感激の面持ちで語っておられました。

なおこの設計図は、この日の討論を参考にして、一部修正し、八月二十日の定例総会において正式に公開されることになっています。

募金三千万円か

「むつかしい資金調達」

この同窓会館の建設で一番問題となるのが建設資金です。倉本さんの話によると設計図の建物で最低三千万円、ちょっとしたものにすると三千万円は必要ということで、家具類を含めるとどうしても三千五百万円程度は必要のようです。したがって資金をいかに集めるかが大きな問題となってくるわけです。

建設準備委員会では、いちおう目標を三千万円とし、一万二千人の会員を対象として募金活動を行うために今その準備を進めております。

これによると会員一人あたり一口二千円を予定し、即時に払うことがむつかしい場合には、郵便貯金の積立てを利用し、月百円ずつ二四ヵ月積立ててもらうようになっています。

いずれにせよ会員からの寄付だけでは多少無理があり、大口の寄付をどこに求めるかがこれからの課題といえます。

解説

同窓会館の建設が決議されたのが昭和四〇年――今ようやく軌道に乗ろうとしている。

一万二千人の同窓生――その一人一人の心をつなぐものとして〝点〟はようやく姿を見せつつある。明治、大正、昭和と三代に渡って流れて来た母校の歴史がその〝点〟を求めているのである。

県女の卒業生にとって現在の皆実高校は母校という感じが極めて薄い。彼女らの母校は、四本の門柱のたつ下中町の学舎である。その学舎も一瞬にして影も形もなくなった。残ったのは四本の門柱と友のなきがらだけである。それゆえに母校を求める彼女らの願いは人一倍強いのである。その母校を彼女らは〝点〟の中に見い出そうとしているのである。

それゆえに〝点〟に対する彼女らの執念はものすごい。コンクリートのひとかけらにまで母校の思い出をなすりつけたいのである。

皆実高校の卒業生にとって、彼女らのそういう行為はどうしても年寄のわがままにしか見えない。彼らにとってその〝点〟は憩いの場所であればよいのである。同級生が集まって杯をかたむけ、昔話に花が咲けばよいのである。彼らの母校は姿形は変わっても、ちゃんと出汐町に存在するのである。四本柱の教室はなくとも出汐町の母校の土の中に彼らは彼らの匂いを嗅ぐことが出来るのである。

この彼女と彼を結ぶものはやはりその〝点〟しかないのである。彼女と彼がお互いに助けあってその〝点〟を自分達のものにしたとき、彼女と彼の心はひとつになることができるのである。

三千万という数字は我々にとってはるかかなたにあるように思える。一人ではとうてい手の届きようのないものである。しかし一万二千人の手をつなぎあわせれば、あるいはいとも簡単に届くかも知れない。有朋と皆実との違いこそあれ、同じ歴史の中に生まれ育つものとして、彼女と彼が手を握りあったとき、その〝点〟はほんとうに現実のものとなるのではないだろうか。